
まじこい？他でやってください！

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじこい？他でやってください！

【Nコード】

N4155Z

【作者名】

天叢雲

【あらすじ】

テンプレな過去を持つ人付き合い苦手な主人公が乙女かいぶつから逃げまくり、捕まるお話。

最初は鬱っぽいけど徐々にコメディ化します。

注意：主人公は非転生者、チートだけどあまり戦わない、合法シヨ

タ+微男の娘、かなり厨二な力を持つなどがあります。注意してね

受難、すたーと。(前書き)

自分の出たアイデアで書く三作目。

原作知識はうる覚えだから気を付けて！

受難、すたーと。

貴方にとって、力とはなんですか？と聞かれるとどう答えますか？

ある者は暴力。

ある者は自分の誇り。

ある者は自分の人生そのもの。

ある者は自分を満たすもの。

ある者は……。

そして僕はこう答えるだろう。何があっても揺るがない答え。

“誰かの、小さな幸せをもたらせるもの”

「・・・またやってる・・・」

「キヤアアアア！川神先輩カッコいい！」

「さすがは百代さんだ！川神最強！」

いつもの日常、僕は学業をするために学校へ行く。
父と母は僕を気味悪いと捨て、今まで一人で生き、ある親切な人からの援助でこうして勉強ができています。

通学路の途中、橋の下の川原では朝の恒例とも言える光景が広がっていた。

それは僕が通う川神学園の最強の武術家と言われる川神百代先輩。

あの人に勝ち、名を上げようとするものがこうして川神先輩に挑戦をし、ことごとく敗れ去っているのだ。

今日も川神先輩が圧勝し、倒した不良たちの関節をはずしたりして人間テトリスなるものをしていました。

「・・・・・・・・」

僕はそれをただ、冷めた目で見ていた。

たとえば、喧嘩を売った不良たちが悪くてもあれはやりすぎだ。

あんなのが最強の武術家だなんて僕は思いたくはない。

「よーし！できた！」

川神先輩は人間テトリスを完成させると蹴りで不良たちを崩した。

・・・なんであんな楽しそうに出来るか僕には理解できない。

それにギャラリーもなぜ止めないであんなにはしゃぐかも理解できないよ。

「・・・僕が、おかしいのか？」

こんな光景を見ると自分がおかしいのかと目眩がする。

これが常識なら僕は非常識なのか錯覚してしまう。

僕はそれ以上見ていられなくなり、足早にその場を去る。

「・・・またあいつか・・・」

それを川神先輩が見ていたのも僕は知らなかった。

それが日常。僕がいつまでも馴染まない日常であり、嫌う日常だ。

「・・・あれ？どうしたの？」

「！川神さん・・・？なんで？」

「もう。私は一子、ワン子でもいいって言ってるでしょ？」

「・・・またなの？川神さん」

橋を急いで渡り、通学路を歩いていると一人の同級生がタイヤを引き摺りながら話し掛けてきた。

川神一子。川神先輩の妹さんで川神学園でも有名な生徒である。

川神姉妹は川神学園の学長である川神鉄心の孫でもあるため、有名にならないはずはないのだが。

だが僕はどうしても川神の名を好きになれそうにない。

昔に世話になったあの人は川神鉄心によって殺されたから・・・。

「・・・ごめん。川神さん、もう行かなきゃ」

「え？あ、ちょっと待ってよ！」

この人は悪くない。そう思ってもやはり我慢がならない。

再び足早に歩き、川神学園に向かうことにした。

後ろで川神さんが何かを言っていたが、僕は聞こえないフリをして立ち去った。

「・・・」

「ワン子？どうかしたのか？」

「あ、お姉さま・・・またあの子と話したんだけど無理だったわ」

「あいつか・・・あんな根暗に構う必要はないんじゃないか？」

「違うわお姉さま。あの子の目・・・昔の私に似てたから放っておけなくて・・・」

「ふーん。ま、ほどほどにな

（あいつ、何かがおかしい。私でも計り知れないような力を秘めている気がする・・・戦ったらどうなのだろうか？）

所変わって川神学園

「よー。昨日のあれ見たか？」

「おう。いい声してるよな」

八時。僕は学校に間に合い、自分の教室である二年F組の自分の席で静かに本を読む。
周りは騒がしいが、僕はいわゆる人間不信一歩手前なので人付き合いは苦手だ。

だからこそ、あまり人とは関わりたくないのだが、あの人と約束をしたため、学校には通っている。

「でさー」

「へーまじかよー」

「そうそう」

「えー！うっそー！」

「あのイケメンカッコよかったよー」

・・・正直、嬉しい。

人付き合いなんてあまりしたことないのに学校生活は無理があったか。

「やべ！そろそろ来るぞ！」

「寝てるやつ起こせー！」

「おい、またDVD出しっぱなしだぞ」

「おっといけね」

クラスメイトが慌ただしく動くのは担任の教師が来るからである。まあ、鞭で叩かれるのは嫌だろうから当たり前だろう。

僕は読んでいた本を閉じ、付けていたイヤホンも外して鞆に仕舞う。

「よーし。じゃあ出席を取るぞー」

こうして僕の川神学園での学校生活がまた始まる。

受難、すたーと。(後書き)

微妙なところで切ります。

風間ファミリーにまだクリスとまゆっちはいません。

第一話（前書き）

まじこいっていいね。

特に百代姉貴がいい。ワン子と姉妹井にしようか考案中。

第一話

「……全員いるな。では連絡事項を伝えましょう」

朝の恒例の出席を取り、担任の教師である小島梅子先生が連絡事項のプリントを配り、朝のHRは終わった。

プリントには人間測定についてであり、詳細が書かれていた。

「（……やはり、僕には合わない……ここを選んだのは間違いだったな）」

「あ、ねえ」

「……川神さん」

「もう。なんで朝はすぐに行ったの？話をしたかったのに」

「……僕はしたくない」

朝に会った川神さんが話し掛けてきた。

川神さんとは同じクラスで席も後ろにあるため、かなりの頻度で話し掛けられる。

世話焼きの川神さんは何かと僕を気にかけるが僕は嬉しくない。

「・・・もう僕と関わらないでくれ。僕は君も川神先輩も学長も嫌いなんだ」

「な、なんで？理由が知らないままじゃどういふことかわからないよ」

「・・・保健室に行く」

話すのも嫌になり、教室から逃げるように保健室に行くことにした。

「ちっ、またサボりかよあいつ」

「なんであんなやつが川神さんと話してるか意味不明だし」

「根暗だから仕方ないんじゃない？」

「ぎゃはははは！それ言ってるな！」

「ワン子・・・」

「・・・どうして話してくれないのかな？」

そんな声も聞こえないフリをして・・・。

僕は保健室にいる保険医の先生に許可をもらい、ベッドを借りて横になった。

「十六夜君、私はちょっと職員室に行くから。何かあれば呼んでね」

「？」

「はい・・・その時はお願いします」

ちなみにだが、僕は体がかなり弱い。

昔に事故を起こしてからその後遺症なのか、背もあまり伸びず、成長が緩やかになった上に筋肉も衰えてしまっている。

そのせいか、貧血で倒れることがよくあり、保険医にも覚えられないほど保健室の常連になっているのだ。

ベッドに横になったまま、イヤホンに付けて音楽を聴きながら目を閉じることにした。

「……………」

「あら。起きた？」

「先生……………」

「貴方、朝から今までずっと寝ていたのよ。相変わらずなのね十六夜君」

「すみません……………」

「ま、いいわ。今は昼休みだけど何か食べるかしら？」

「……………教室に……………弁当が……………」

「ふふっ、これでしょ？川神一子さんが持ってきてくれたわよ？」

「……………また川神さんか……………なんなんだあの人は。」

まあ、持ってきてくれたならもらっておこう。お礼だけはして……………」

。

「……ねえ」

「ん？なにかな？」

「なんで僕、ここにいるわけ？お礼をしようとしたただけなのになんで無理矢理連れられるの？」

ブスツとした顔で僕を無理矢理誘拐した犯人、川神さんを睨む。
弁当のおにぎりだけを食べて川神さんにお礼を言いに行ったらなぜか捕まって屋上に来たわけなのだ。

屋上には川神さん以外にも何人か、風間ファミリーとかいう集まりの人達がいた。

「十六夜……だっけか？俺は直江大和。よろしくな……思えば話すのははじめてだな」

「……十六夜蒼穹^{ソラ}。蒼い穹と書いて蒼穹って呼ぶ」

「いい名前じゃん。あ、俺様は島津岳人。ガクトでいいぜ」

「僕は師岡卓也。モロって皆から呼ばれてるよ」

「……おい京」

「椎名京」

「お前なあ……」

「だってこいつ、根暗みたいで嫌いだもん」

「ば、京！」

「いいよ。慣れてるから」

風間ファミリーの直江大和、島津岳人、師岡卓也、今はいないリィダーの風間翔一、川神一子、椎名京、そして川神百代。無理矢理ながら、友達にされることになった。

「そういや、お前はよく保健室に行くけどサボりなのか？」

「ガクト！なにデリカシーのない事を聞いてんのよ！」

「これだから筋肉は」

そしてなぜか昼食に無理矢理付き合わされ、肩身狭いなんのって……人付き合いは嫌いなのに。

島津岳人がなぜ僕が保健室に入り浸りなのか聞いてきて、他の面々から殴られている。

「でも気になるな。なんであんなしょっちゅう行くんだ？」

「……………」

「大和まで！十六夜君、言わなくてもいいんだよ？」

「そうそう。ガクトの戯言だと思って。ね？」

川神さん、モロがそう言うのが話そう。話して僕から離れてもらおう。

「いいよ。話す」

「……聞いてなんだがいいのか？」

「別に。貴方達は知りたいたいから聞く。そうでしょ？なら話すしかないじゃないか」

「それはそうだが……」

（なんか気が狂うな。こいつのペースに吞まれるようだ）」

「僕は事故で体が弱くなってね、大半は貧血で保健室に行ってるだけだよ」

そう言うと空気が重くなるのがわかり、全員が元凶であるガクトを睨むように見ている。

本人は冷や汗流して明後日の方向を見ていた。

「……五年前の事故は知ってる？」

「五年前？」

「……もしかして海難事故か？客船が沈んで死亡、行方不明者がかなり出たやつだろう？それが……まさかお前……」

「そう。あの時の唯一の生き残りが僕なんだよ。直江君」

「またもや、空気が重くなり、どう答えたらいいかわからないような顔をしていた。」

「……じゃあ僕は行くよ。できたらもう関わらないで」

「そう言うと僕は立ち上がり、屋上から出て再び保健室に舞い戻るところにした。担任の教師である小島先生からも許可をもらってるから大丈夫だろうし。」

「五年前の海難事故。とある場所にて有名な豪華客船の招待状をもらい、僕は乗った。」

「最初は完成した豪華客船の記念に祝杯をしたりと騒いでいた。僕も楽しんでいたが、事件は起きた。」

「原因不明のガス爆発。」

それにより、豪華客船の乗客はパニックになり、脱出をしようとするが間に合わずに全員死亡したというのが表向きである。

実際は違う。僕は乗っていたからわかるが、あの時・・・脱出用の船に乗ろうと殺し合いをしたのが原因で脱出が間に合わなかったのだ。

僕が助かったのは離れていた場所にいたから、ガス爆発の爆風で頭を打って気絶していたから助かったのだ。

頭を打ったせいで何が原因でガス爆発が起きたか忘れ、警察には何回も事情聴取されたけど。

「あら十六夜君」

「すみません。まだ気分が優れないので・・・いいですか？」

「いいわよ。でもあんまり寝ていると出席日数ヤバくなるわよ？」

「・・・まあ、なんとかします」

「それより十六夜君・・・女装する気になった？」

「断固拒否させてもらいます」

普段は前髪を貞子のようにたらしめて地味なイメージが持てるようにしているが、僕の顔は中性っぽく、女装が似合う童顔な容姿をしているのである。

僕はこの容姿は嫌いなのだが、保険医の先生には大絶賛で女装させようと目論んでいる。

実際に僕の素顔を知るのは保険医の先生、小島先生、昔に知り合った揚羽さんだけである。

・・・揚羽さん、目が血走って怖かった。

「じゃあおやすみなさい」

「また家に送ってあげるからゆっくり寝なさいな」

「・・・はい」

保険医の先生、名前は冴子先生とはプライベートでも付き合いがあり、海難事故直後のカウンセラーをしてくれた人でもある。

時たまに、寝ている僕を家に送ったりしてくれるのだが、添い寝とかやめてほしい。

・・・出席日数、は大丈夫だけど授業があれだなあ・・・。

第一話（後書き）

体が弱いのは本人が思い込んでるだけ、実際はチートなボディーを持っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4155z/>

まじこい？他でやってください！

2011年12月15日22時52分発行